



～シーズン1「SMクラブの受付」～

エピソード3:入り口

しすてむ♥きよたけ

Clickして下さり、ありがとうございます。
初めて開いて下さった方。どうも、はじめまして。開いてビックリされた方もいるかもしれませんが…。

前回のエピソードでは、[「みちのり」](#)とし、「面接に至るまで」ついて綴っています。よかったら、そちらも…。

毎回読んでくださっている方。物好きですね。誤字脱字、起承転結ない綴りを読んでくださり、ありがとうございます。

今回のエピソードは、面接日のことを中心に綴ります。

ラインアップは、「1. 拠点から離れる」、「2. 心境が含まれた街」、「3. まずは行ってみる!」、「4. たどり着けない!」、「5. 無知人の心境」、「6. 鞭あり面接」。×は「7. 決断のとき」でございます。

SMプレイ自体に興味ある方にとって本稿は、面白くないと思いますので、別のモノを読むか、お店へ行ってプレイをどうぞ!どの店に行ったらいいかわからない方は、ご連絡をいただけたらそれなりに考えます!

※これまでの登場人物「貴子」。この時期、

「さん」付けで読んでいたので、当時の呼び方に戻します。

1. 拠点から離れる

駐車があまりない街で、前日から駐車場を検索し、いくつか候補をあげておいた。遅刻をしないことは一般常識だが、僕は寄り道したくなったらついしてしまう。しかし、今日は、貴子さんのメンツもある。ってことで、早目に出発をした。

この日は、体にシャツがじっとりと張り付くような蒸し暑さで、面接に行こうとする僕を引き止めているかのようだった。しかし、雨は降っておらず、天気が僕の背中を押しているかのようでもあった。

当時乗っていた、フロントフォークを長くした(前輪の位置が通常より前についている)ドラッグスター400ccのバイクに乗り、家を出た。

当時付き合っていた彼女も親も友人も、今から行く場所を知らなかった。特にいう必要もないとも思っていた。その反面、言わない方がいいとも思っていたからか、後ろ髪を引かれる思いだった。

思いの外、それは悪いものではなかった。夏のバイクの走行中にそっくりだった。湿って熱い風の中でも進めばわかる、爽快な風があるかのように。



2. 心境が含まれた街

街の駐車場に、予定よりもかなり早い時間に到着した。コンビニに寄っても持て余していた。それから、喫煙スペースに立ち寄り、3、4本のタバコを吸うくらいの時間だった。颯爽と風を切って走っていたわりに「今なら帰れるかも？」そんな言葉もよぎったのだが、余裕もあった。

喫煙スペースには、一人でいる人が多いとか、携帯を触る人は誰とメールもしくは調べ物をしているのだろうとか、スーツ姿で電話をしている人やパソコンを開き座っている人が眼に入ると、仕事をしているのだろうかとか、いくつもの大きな袋を両手に持ち、スペース内をうろうろしている人の持ち物は全部拾い物だとか、自分の周りにいる人が眼に入るくらいに。

スペースの外側まで見ていた。カップルが手をつなぎ、仲良さげに歩く姿。あっちだこっちだとマップを見ながらうろつく観光客。そそくさと歩くスーツ姿の男たち。街中は、賑わいを見せていた。

どの光景も普段と変わらなかった。僕が、いつもと違うだけ。だから印象に残っていたのだろう。いつもなら、眼に入っていた彼らと同じように、何も気にせず過ごしているのだから。

今日の僕は、彼らとは何か違う感じがしていた。特別であるような感覚と、取り残されたような感覚。

しかし、そんな感覚どうでもいいやと思う節もあった。そもそも、周辺に居る人の心境を知る人なんて、いないし気にもしないのだから。僕がその時間にしていたメール相手も、これから入ろうとしている職場のことなんて知らない。人は全てを言わないものだ。僕も自分の周りにいる人の心境なんて知らなくていい。聞くな、悟りでも開いたかのような風貌を装ってからしたら面白いだろうから、そうするつもりだが。(めんどくさいから、しないけど)

人はそれぞれ異なる心境をもって過ごしているのだから、そこは一致しているわけで、完全に彼らと違うわけでもない。みな、それぞれの思いを持ち、もしくは抱えたまま、街を歩いている(場合もある)。

それぞれ異なる歩みが集まる街中。それは当たり前のこと。そして、異なる歩を違和感なく過ごせることも、街の一つの顔なのだろう。

3. まずは行ってみる!

僕は「行こう！」と勢いがあった割に、急に尻窄みになっていた。僕が握りしめていたのは、貴子さんから教えてもらっていたイメージがつかない言葉、「変わった職場」だけだった。

何かを始めるとき、わからないから不安な気分になることだってある。そこから、新しいことに対し、挑戦や止めておくことだって、どちらを決めるかは自分次第だ。

そう思うと、やめておくことだってできたのになぜだか僕は、まずは行ってみよう、そこで頑張ってみようと思った。扉が開いたら僕は、進んでみる。あとは、流れに任せてそこでやってみるモノなのだろう（やったことで煙たがられる場合だってあるけど）。

余談

ちょっとだけ、巡り合わせの中で起きていることに触れてみます。

最近、何か始める際、「根拠」や「理由」を必要とされているような気がします。でも僕は、それより先に「やってみよう！」と思い進んでみます。僕にとっての「根拠」や「理由」は、「機会」そのものなのでしょう。

自分の経歴やできることを先に提示せず、相手とそれなりの巡り合わせで進んでいるのかもしれませんが、「機会」に乗るときは、僕の好奇心で選んでいることもあると思います。自分の能力に見合っているか見直さずに挑戦しているのかもしれませんが。

そうした、ある種の好奇心は、時として仇となることもあります。これまでの経験において、したことがなかった分野に入ると、これまでの状況や規範を知らずして進めてしまうのですから、崩

すことや相手にお手間をとらせることだってあります。

しかし、自分で仇になっているかも！と思っていても、ここからバージョンアップがあるんじゃないか？と思うこともあります。一緒に考えてくれる人や別の楽しみを教えてくれる人がいることに気づくこともあります。そういう人たちが助けられるから、「やってみよう」と思うのかもしれない。

勝手なことしすぎたかな…と思い反省することも多々有るのですが…。

いずれにせよ、どう転がっていくかなんてやってみないとわからない！でも、共になんとか始めてみよう！それ自体が、ドラマチックに展開していく。だから僕は、「機会」に乗っかってみることに自分が、好きなのかもしれません。

僕が携わったSMクラブにも、乗っかってみて進み楽しむ人たちが居ました。なんせ、プロ童貞（素人童貞は、風俗で初体験をした人のことを言います）の僕がいきなり、SMクラブに入って、いつの間にか続けていたのですから。彼女たちの歩みなくして、僕はなかったと思います。

ま、僕のおかげやろ！馬鹿野郎！としゃしゃり出たくなることだってありましたけどね。でも、共に転がれて少しでもよかったと思う人（客も含めて）がいたなら、それで良かったと思っていたことに今更気づいたのでした。

ちょっとだけ触れると言いながら、長くなりました。

4. たどり着けない！

貴子さんから熟女だのマダムだのと紹介された雅さんから、「到着したら電話をくださいね」と言われていた。所定の場所を知らず、だいたいその辺りだろうと思う場所

から連絡をした。喫煙スペースが、まさにその辺りだった。

面接時間 10 分前。

「はい」、「あ、14 時から面接のお願いをしています、清武です。」「例の場所（ちゃんと場所の名前をおっしゃいました）ですか？」、「今、喫煙スペースなんですけど、そこはどう行ったらいいですか…？」。

そんなこんなで、某ファーストフード店があるだの、某デパートがあるだの伝えてもらいながら、右だの左だのまっすぐだの。

「すみません。全然ないっす…」某店を背中側にして左手側に細い道だのお菓子屋さんだの教えてもらいながら…「いや、ないっす…。あのー僕、今某デパートの角で交差点です」、「行き過ぎてるわねー」ということで戻ることに。

「赤の T シャツかしら？今見えたわよ」、「え？」会ったこともない上、僕は人混みの中、歩いていたのによく分かったな…と思った。

のちに僕も電話誘導しながら、迷っている客がどの人か見つけられるようになった。受付をこなし始めると屋外に出れば、目星をつけられるようになるものだった。

ようやく伝えられていた、全然難しい場所ではない、道に入った。扉を開け、体半分出し、前髪をポンパ風にあげている女性を見つけた。

雅さんに近づくまで、小走りで 15 秒くらい。かなり長く感じた。時間に遅れていないだろうか、この時間は仕事の邪魔になったのではないだろうか、とそわそわしていたのだろう。店まで、なかなかたどり着けなかったのも、僕がテンパっていたから

だろう。

風俗業界、怖い男が出てくるんじゃないか、意外なことに店長は女性。これが、僕にどう映っていたかと言うと、もしかしたら…もしかしたら！これから怖い人が出てくるかもしれない。でも丁寧に案内してくれるから、そんなことあるわけがない！が…とはいえ、何をもって、そう認識したらいいのだろうか！？という心境だった。

僕がイメージする性風俗店店長と雅さんが発する「あ、いいわよ」とか「あ、そんなのね」と淡々として柔らかな口調よって、さらに僕を縮こまらせていたのだった。



5. 無知人の心境

扉の中に入った。内側にかけている鈴のカランカランとなる音とともに扉が閉まった。

「…うわ。こわっ…僕どこに連れて行かれるのだろう…」とだけ思った。

薄暗く…人、ひとり分のスペース。そして、直ぐ、同じく狭い階段。しかも、急…階段の先は何か黒い布がかけられている…がそれ以外何も見えない。むしろ、それも少ししか見えない。

嘘だ！よく見えるものだってある！身体のラインが見事に映し出されるくらい、び

っちりとした膝丈くらいのワンピース姿の雅さんだった。

フォルムがエロい！エロいけどシチュエーションが怖い！！エロくて怖い！シンプルにしてもややっこしい！！とか思いながら階段を上った。

ついて行くと次第に見える、次の扉。無店舗とわかっているけど、貴子さんも雅さんも店って言っている。扉の先で、何か行われているんじゃないかと疑い深くいた。

さらに、僕が何かされることはないよね？するともないよね？断るなら「ヤダ」しか出てこない僕だから逃げようがないかもしれないとまで思った。

でも…貴子が、「その日出勤だからお会いすると思います」って言ってたことだし…きっと、なんとかなる！！

思考の中に良き兆しが見えたころ、次の扉の中へ。また次のステージが出てきた。左側に黒のカーテン。右側もカーテン。右側は空いており、ソファが置いてあった。

てっきりこっちに案内されるものだと思ったが、「靴を脱いで」と言われ、左側に案内された。そっちは何でしょうか！？淡々と仰っていますが、不安ですが何か！？と心の中で言っていた。

「靴は、どこにおきましょう？」、「そのまま置いていいわよ」、「はい」。

面接に受かるかとかそんなことどうでもいい。「僕は今、どこに連れて行かれているのかだけでも教えてもらえたら、もう十分です」と思った、たった30秒くらいの出来事だった。

余談

「無知の歩み」とつけたよう、無知だから自分

が知っている状況だけで想像を膨らませていたと思います。それが、ネガティブに展開されていました。

でも、それだけではありませんでした。知らないことがよくないと思った体験ではなく、先に知っていることが全て良しかと問えば、そうだとも思わなかったという体験だったのです。

想像していくから、いろいろな創造もあります。芸術もそうかもしれないし、会話もそうかもしれない。なんなら人との関係だって、わからないから始まり、創造されていくような気がします。知らないということも大事なことになるかもしれません。知らずして出会うことから振り返ると、場所や人との出会いは、今ある状況の中で、創造されていくことがあるのでしょうか。あれこれイメージをもって、そうではないかもと気づき、進み始めた「受付」だったのですから。

これも、前述した余談と同じくSMクラブに居る人たちから気づいたことなので、おいおい。

6. 鞭あり面接

雅さんが、黒のカーテンを開けた。…うわ、女の人がいっぱい…。「お邪魔しまーす」。

雅さん以外に、4人の女がいた。「こんにちはー」。「…」目線だけ向けられ、彼女たちは、そのまま戯れていた。

「どうぞ、狭いけどあそこの奥にでも座って」と雅さん。「あ、はい」。狭い部屋にもかかわらず、物が散らばりさらに狭くなった部屋の隅っこで、囲われたとしか言いようのないくらいの場所に、緊張しているくせにあぐらをかいて座ってしまっていた。

4人のうち一人は、小さめの椅子に座り、足を組んで、頬杖ついてパソコンで何かをしていた。その他の人たちは、もう一つあ

るパソコンの周りにいて、ヤンキー座りや体操座り、正座をし、パソコンの前でなんだかんだお喋りをしていた。アニメか何かの話をしているようだったが、僕は興味がなかったからか知らない内容だったかで、何の話題で持ちきりだったのか入ってこなかった。

入って来たのは、僕の背後にぶら下がる鞭だった。あの時、こんなことを思っていた…「うわ〜鞭だ！初めて見た…いろいろな色や形、長さがあるな〜！あ？ここに居る人たちって…これを使うのか…使われているのか？…想像つかない…」

雅さんが、「お待ちせ」と言って僕の左前に正座をして座った。僕も慌てて正座をした。

一般的なアルバイトの面接と同様、週に何回入れるか、何時くらいから来られるかなどを尋ねられた。週に2、3くらいであることを答え、月によっては、もっと入れる時もあるし、むしろ全く入れられない週もあると加えた。

「ミカサさん、ちょっとお茶もらっていいかしら？」、「…あ、はい。どうぞ」。パソコンデスクの前に座っている女性は、どうやら「ミカサ」という名前らしい。

見た感じ20代。白っぽく、小さく花の絵柄が描いてあるワンピースを着ていた。どこかフェミニンな感じがし、柔らかい印象だが、ハスキーな声から、クールな印象も受ける。電話もあるし、あそこが受付のようだ。ということは…彼女は受付か…。

受付って男やと思ってたけど、女の人もいるんか！っていうか、男が出てこない…思っていた業界と違っていた。

「お茶どうぞ」。ミカサさんの烏龍茶 1.5リットルのペットボトルから、『Hysteric Grammar』で黒のスカルが描いてあるマグカップに注がれたお茶を受け取った。頭上にぶら下がる鞭が気になり、お茶を飲んでいる場合でもなかった。こんな状況の中での面接が、初めてだったからだろう。

でも、話はいたってシンプルだった。受付の勤務は基本的に「通し」、「早番」、「遅番」の3形態。「通し」は、店が開く12時〜受付終了の22時（当時の時間）。12時から予約が入っている場合は、その前日出勤。22時から予約が入っている場合は、プレイが終わるまで。

「早番」と「遅番」の境目は、18時。12時から18時が「早番」、それ以降が「遅番」だ。

通しと遅番に入ると帰りの時間は、コースの時間によりけりということだ。給与は、時給1000円。それ以下もそれ以上もない。

余談

風俗店のHPに「受付時間12時〜22時」と表記されているとします。この場合、22時までプレイを終了しないとイケない！と思うかもしれませんが。多くのサービス店（飲食店をイメージすると分かりやすいかも？）の上記表記を見ると、店が閉まる時間が書かれているからかもしれません。

僕の知る限りの風俗店では、ラストの時間からスタート可能です。受付もキャストも、ラストにプレイが入ることを了解して各々の仕事に取り組んでいます。早く帰りたいと思っても、場合によりますが、ラストであっても予約が入り、よかったですな〜と思うこともあります。

面接時、不規則になる大変さも想定しましたが、

実際には、その時間にできることを探すことができ（しない人もいます）、充実した深夜を過ごすことができます。

ここから能力と給与という観点から、店の紹介を。僕が働いていたところは、深夜手当や残業手当などは一切ありません。どんだけできる仕事が増えたとしても、手当がつくことや昇級はありません。

でも、そんなわけでもありませんでした。僕は、ボスに無謀、かつ、何の意味があるのかわからない提案をお願いをし、ボスに同行させてもらい、すすきのに連れて行ってもらったことがありました（そのうち書きます）。

何の意味があるのかわからないにもかかわらず、「いくらいるのか!？」と言われ、「自分が妥当だと思う金額をどうぞ!」ということで、交通費は出してくれることがありました。しかし、翌月手にした給与明細には、報酬として滞在していた時間給と何か上乘せの給与をいただいていたことを知りました。

実際、なんの手当もなく、仕事も店自体と関係ない仕事もはいつてくることや、ほぼ24時間体制になってしまうようなこともある職場ですし、体制が整っていないと言ってしまえばそうかもしれません。ですが、僕の体験からすると、そうだと切り切るには早い! そう思ったのでした。

もちろん、それぞれ組織や個人の理念によって、崩したくない何かがあると思います。それがあから成り立つわけなので、大切なことだと思っています。僕が勤めていた店は、昔からの馴染みや恩を大事にする人たちがいたので、それらがあるから始まり、成り立っていました。

しかし、それだけで成り立っているわけではないということも知っておいたほうがいいとも思いました。親しみがあったり、平等に扱おうとした

りすることで、一人ひとりのよさが見えなくなってしまうこともありました。別の言い方をすれば、親しいしお世話になっている、もしくは、大変なときに頼った相手だからと言って、希望をなかなか言いにくい状況を、染まっていない僕は感じていました。

ボスも通常業務時間外に業務外のコトを頼みやすかったのかもしれませんが。それに対し、誰かだけに給与アップということをする、鼻負しているようで気が引け、こそこそお金が動いていることもあったのかもしれませんが。

でも、受付はみな、良く動いている人にはプラスがあって良いと思っていました。

上記は、僕の体験後の振り返りで、ここからさらに考えたこともありました。平等にすることを中心に考えなければ、もしかすると結果として、受付だけでなく、キャストも働きやすい環境につながる、それは、客につながる何かなのではないかと。

僕が、ボスに提案をした経験では、理解を得ることはそう簡単ではなかったですが、かといって全く理解がないというわけではないということに気づけた始まりがあったので、他の人にもチャンス!と思いました。そこで、他の受付にも、給与を出してもらおうよう自ら言ってみよう提案をするようになりました。その人たちには、好きでしていること、さらにスキルある分野がいくつかありました。そのうち書くとします。

全て、うまくいったわけでもないですし、今の店の現状がどうなったのか細部までは知らないのですが、今でも彼らの、そして店のこれからを気にしてしまうような場所でした。



7. 決断の時

「ミカサさん、シフトいいかしら？」雅さんは、シフト表を手にしていて。「清武くん、いつから来れるかしら？」、「あー…うん？」。

返事をしようと思ったら、下の扉の鈴がカランコロンと鳴った。「あ、貴子ちゃんね」。1、2分後、「おー！久しぶり」、「あらーほんと久しぶりね、清武くん」。「おかえりなさい」と他の人たち。彼女は、プレイから帰ってきたようだった。

しかし、あの時の僕は、彼女は海外旅行にでも行っていたのだと思っていた。大きな地味目のゴールド色スーツケースを持っていたからだった。だが、僕の後ろにもいくつものスーツケースが並べられていて、仕事カバンであると察し、「旅行帰り？」とは声にしなかった。

「ここでは、貴子だからねー」、「あ、うん。わかったー」名前を間違えないようにしようと思った。

「いつから来るのー？」、「今、清武くんに聞いてるところよー」。

面接だけど、何で働きたいとか、なぜここでとか、聞かれていない。雅さんと貴子さんの間で決まっていたことを、ここで知っただけだった。

リュックから手帳を出し、「7月10日」（くらい）を初出勤日に決定。

「それじゃー、10日に住民票を持ってきてね」、「はい。よろしくお願いします」、「よろしくねー清武くーん」、「うん！またねー。あ…お茶ご馳走さまでした…」 「…」 「みなさんお邪魔しました…よろしくお願いします…」 「…」。君たち、すごく楽しそうに戯れていたじゃん！これじゃ、先行き不安じゃねーか！と思った。

靴を履いた。僕が1階のドアを出るまで、いや、見えなくなるくらいまで雅さんは、お見送りをしてくれていた。

僕は、来た道をさっさと歩き、喫煙スペースに戻った。

僕は、SMクラブの受付の入り口に簡単に、だけど、てんやわんやした心境で入り、ここでやっていけるのかよ馬鹿野郎！という心境で出ていったのだった。

余談

本稿では、人名をアルファベットで表記する方が楽なのですが、彼女たちの名前は大事にしたいと思い、僕が勝手に名前をつけて綴っています。それは、彼女たちにキャスト名があるから始まること、関係が生まれることがあると思ったからでした。

そこで、キャスト名という本名ではない「名」が出てきたので、「匿名」という言葉を使って、本名を隠した名前だからこそ、事の始まりがあるということ触れてみます。

いきなりですが、店側は、女の子の本名を知っているのでスタートは「匿名」ではありません。言い換えれば、本名ではスタートは切らないことが当たり前とされています。この段階は、面接時

期にあたります。

採用が決まり、いよいよ「匿名」段階に入ります。名前の作られ方は、僕が知る限りの風俗店では、店が勝手に決める場合や店側と女の子の間で決めます。女の子が自ら名前を提案をして採用されること、その逆もあります。この段階が、キャスト名決定の瞬間です。

風俗嬢の場合は、名前ができたこと、「匿名」になったことで、公開可能になります（書類手続きは省いています）。「匿名」であるから公開でき、他の人ともかかわり始めることができます。

これから僕は、「匿名」であるから始められること、ある意味、非公開であるから始まることもあると言えるでしょう。

そしてそれは、名前を隠しているけど、しっかりと「名前」があり、彼女たちは存在しているということだと思います。お店に所属しているけど店の人抜きで客と接する彼女たちですから、「匿名」から生まれる「名前」は、重要な看板だとも言えます。

本名にとらわれず、本名じゃないからこそ進む彼女たちと出会いから、人は、どこからスタートであっても、「名前」があることで社会に出られ、存在すること。それが、戸籍に登録されているという意味で本当であるか、そうではないかにこだわらなくとも、存在することができる社会があり、また、新しい名前を加えることで過ごせる個人もあるのだと思いました。

清武システムズも、そう名前をつけたから始まったことがあることに気づかされている最中です。こちらは、執筆者@短信で少し触れています。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

**[『清武システムズ限定コース解禁!!ルート
ーク about 熟女コース〜』](#)**

綴り人/しすてむ・きよたけ

[清武システムズ](#)という看板を引っさげ、活動中。しすてむ・きよたけは、アイデアや意見ではなく具体的な変化のための装置です。動いて、頼って、甘えるファシリテーター。

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net